尾道商業会議所記念館
第３７回企画展示解説

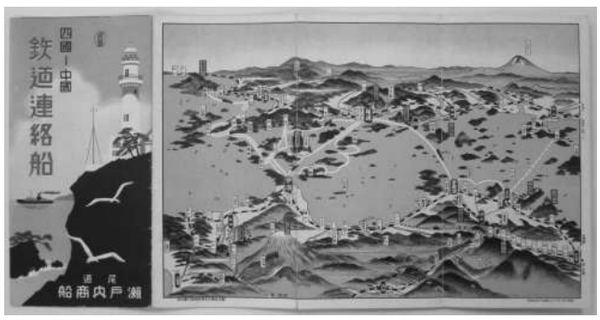
2019 年 11 月 8 日～ 2020 年 2 月 26 日

テーマ　尾道港開港 850 年
～みなと尾道ビジュアル・アーカイブ～

備後国大田庄（世羅町）から、紀州高野山への年貢米を積み出す港として、世に公認された時を起点とする尾道港－以来、遣明船、北前船の商船往来を経て、山陽鉄道開通に至るまでの港尾道の歴史を、３つの黄金時代と、尾道旧市街地から出土した中近世の考古資料を軸に辿った前回展示「尾道港開港 850 年～黄金時代と都市の考古学～」に続いては、古写真や古地図などの資料から、近現代の尾道港の歴史と、尾道港を中心とした人々の営みの風景を、鮮明に辿ってみたいと思います。

写真資料については、明治以降の風景や風俗を鮮やかに伝える写真絵葉書と、日立造船向島工場で広報写真を担当したアマチュア郷土カメラマン・土本壽美氏（故人）の写真から、時代ごとの尾道港の姿を鮮明に伝えるものをピックアップしています。

併せて、尾道港に発着した多数の航路と、それらの船が停泊し、港町尾道の玄関口となった「桟橋」や、「海のトラック」さながらに島嶼部や沿岸部の物流を支えた「渡海船」について、また、大正時代末期に向島の小歌島全体を会場として開かれた謎多き海上博覧会「瀬戸内海勧業博覧会」に着目し、尾道港を中心とした近現代の尾道の姿に、様々な切り口から迫ってみます。



瀬戸内海航路・中四国航路の案内パンフレット
戦前　瀬戸内商船発行
尾道学研究会蔵

尾道を中心に、広島、今治、香川の多度津など各地へ航路が延びている様子が分かる。自動車が普及しておらず、高速道路や本州四国連絡橋もなかった時代、島嶼部や沿岸部を始めとした瀬戸内海各地は大小の船による多数の航路で結ばれており、生活・経済の上でも必要不可欠なものだった。

尾道桟橋物語

尾道水道を往来する船舶の発着場「桟橋」の林立は、港町尾道を象徴する風景の一つです。ここでは尾道港周辺で見られる・見られた桟橋について紹介します。

◆市営駅前大桟橋

尾道駅とも接続する海の玄関口として、1933（昭和８）年に設置された市営の桟橋。1960（昭和 35）年の時刻表には、瀬戸内海汽船、因島汽船、備後汽船、愛媛汽船、生口汽船、石崎汽船など様々な会社の船が見える。平成の駅前再開発後、浮桟橋はウォーターフロントビルに接続する位置へ移っている。

◆東予桟橋

今治・尾道・広島の宇品・香川の多度津を起点とする東予運輸汽船（後、瀬戸内商船）の発着航路で、その主力船は「東予丸」であった。桟橋に隣接して切符売り場と待合所があり、その跡地は水上警察署になっていたが、再開発後は跡形も無い。

◆石崎桟橋（丸一桟橋）

四国航路の石崎汽船が発着した桟橋で、福本渡船の桟橋と重なる。桟橋は別名「丸一桟橋」とも呼ばれ、これは石崎汽船の○に一のトレードマークに由来する。1894（明治 27）年に就航した石崎汽船の尾道航路は、鉄道と連帯運輸をする鉄道連絡船として知られ、1969（昭和 44）年には尾道―松山航路に水中翼船も就航した。

◆住友桟橋

三井住友銀行尾道支店前にあった桟橋で、住友グループの原点といえる別子銅山を擁する愛媛県新居浜と、製錬所のあった新居浜沖の四阪島、住友本店のある大阪を繋ぐ航路として就航。尾道から因島三庄・弓削を周って愛媛県西条を経由する尾道―新居浜ルートと、四国中央市から香川県の観音寺・多度津・高松から神戸を経由する大阪―新居浜ルートが見られた。

◆尾崎桟橋（渡し場桟橋）

向島の兼吉との間を往来する土堂の渡し場桟橋は、古くは尾崎桟橋と呼ばれた。これは尾崎伊三郎によって 1879（明治 12）年に開かれた尾崎汽船が発着した事に由来するもので、尾道には 1885（明治 18）年から大阪―下関航路の船便が寄港した。大正初年の時刻表によると、毎日午前７時 30 分尾道を発し翌日の午前６時に下関着。大阪へは午後１時に尾道発、翌日の午前６時に大阪着となっている。

◆中央桟橋（荒神堂桟橋・商船桟橋）

住吉浜に隣接する中央桟橋で、尼崎汽船と競合関係にあった大阪商船が発着した事から商船桟橋とも通称された。1884（明治 17）年設立の大阪商船は、瀬戸内海を往来した定期船の中では幹線的航路にあり、その航路網も広く、朝鮮半島や北海道へのルートにも進出した。尾道発着では本線となる大阪尾道線の他、大阪広島線、尾道門司線、尾道別府線等があった。

◆丸上桟橋（薬師堂桟橋）

住吉浜の東側（薬師堂浜）にある桟橋で、「丸上」とは、「上」の字を○で囲んだ印の丸上回漕店（海運業に関わる様々な業務を扱う問屋。廻船問屋とも。）経営の桟橋であったことによる。1929（昭和 4）年の時刻表によると、香川県の豊島と今治に３路線のほか、福山市沼隈の大越・鞆・因島の西廻りルート、福山市藤江・竹原・笠岡の各港を結ぶ便が発着している。

近現代の尾道港①　～写真絵葉書から～

（尾道港）尾道駅前市営桟橋の壮観
昭和 10 年代　写真絵葉書
尾道学研究会提供

尾道駅前に開かれた市営大桟橋と、停泊する船は四国航路の「第十六東予丸」。駅前市営大桟橋（第一桟橋）は 1933（昭和 8）年に設置されたコンクリート製の浮桟橋（固定式の桟橋に比べ、荷客の積み下ろしの際の潮の干満の影響が少ない）で、長さ 103m、幅８ｍの堂々たるものだった。

みなと尾道港全景　其の二

戦後　写真絵葉書
尾道学研究会提供

尾道商工会議所が発行した観光絵葉書（４枚立）より。中央で一際目立つ白っぽい建物は、住友銀行（現三井住友銀行）尾道支店。その東隣に尾道警察署、尾道商業会議所が見える。写真奥の千光寺山山頂には、ＮＨＫ尾道放送局の電波塔が建つ。

（尾道）尾道市海岸通

1930（昭和 5）年頃　写真絵葉書
尾道学研究会提供

土堂渡し場、向島兼吉との間を繋ぐ公営渡船の西傍ら。中央の尼崎桟橋に停泊する船は尼崎汽船の定期船であり、煙突に入る斜め二本線がトレードマーク。手前に建つ洋風建物は、尼崎汽船の荷客の取扱代理店・向栄舎小西回漕店。海岸通りを西へ向けて走る自動車は、乗合自動車（路線バス）である。

（尾道港）波止場と大阪商船会社中国定期船大井川丸

明治後期～大正初期　写真絵葉書
尾道学研究会提供

中央桟橋沖合に停泊する大阪商船の定期船「大井川丸」。この時期には浮桟橋が設置されておらず、大正 2 年頃に設置された。桟橋設置以前は、「サンパン」と呼ばれた小船で沖に停泊する船との間を繋いだ。尾道での桟橋完成を記念する絵葉書も大阪商船会社から出されているなど、尾道との縁の深さが感じられる。

（尾道）荒神堂濱大桟橋

昭和 10 年代　写真絵葉書
尾道学研究会提供

駅前の市営第一桟橋に対して、市営の第二桟橋として設けられた中央桟橋。停泊しているのは大阪商船から航路を移管譲渡された摂陽商船の船。「荒神堂」の名は、中央桟橋と尾道本通りを繋ぐ「荒神堂小路」に対応している。桟橋周辺に溢れんばかりに積み上げられた荷物の多さが、「行き交う人が肩をぶつけて歩くほど」と言われた荒神堂小路の賑わいを感じさせる。

備後尾道港（其二）

大正期　写真絵葉書
尾道学研究会提供

住吉浜に停泊する機帆船を大きく写した一枚。機帆船とは、帆と焼玉機関（エンジン）を併用した木造の小型貨物船。画面中央の「大」の字（大阪商船のマーク）が付いた建物は、大阪商船の荷客代理店として住吉浜に位置した豊田回漕店である。

（尾道）商船桟橋より見たる尾道港

昭和初期　写真絵葉書
尾道学研究会提供

商船桟橋（中央桟橋）から東（大阪方面）へ向けて出港した大阪商船の定期船。住吉浜には機帆船と帆船がずらりと並び、港の活気や賑わいを感じさせる。大阪商船の後方に停泊する船は、因島・生口島方面を運航する島廻りの巡航船。

尾道港東濱
大正～昭和初期　写真絵葉書
尾道学研究会提供

住吉浜沖から東の市役所（画面右・海際に建つ２階建）方向を望む。奥の山は浄土寺山。船が集まる辺りは薬師堂浜で、商品を納める土蔵が横並びに林立する。絵葉書らしく上部には差出人からの便りが書いてある。

渡海船の記憶

大口・長距離の荷客を取扱う大阪商船や尼崎汽船のような大型の貨客船とは別に、小口･短距離の荷物を取扱う、渡海船（とかいせん・とーかいせん）と呼ばれた小型貨物船の存在も、尾道港の忘れることのできない風景の一つです。

この度、渡海船を利用して商品を尾道港から各地へ送っていたお一人から､昭和 30 年代以降の記憶を証言いただきました。

利用していた渡海船は、西は東広島の安芸津、大崎上島・下島、竹原、忠海、三原市の幸崎、東は福山市の田島・横島、南は因島、瀬戸田、愛媛県新居浜から来るもので、島嶼部や沿岸部などの近隣各地と尾道港との間に渡海船が多数の販路を形作っていたことが分かります。

船名も鮮明に記憶されており、安芸津の安浦丸、大崎の神峰山丸、因島方面の因島丸、重井丸、中庄丸、三庄丸、田熊丸、金神丸（田熊)､旭丸（田熊)､俊丸（大浜)､生口島の瀬戸田丸、金光丸、勝丸、宝丸、金瀬丸等、愛媛県上島町の岩城島からの恵比寿丸、福神丸、共栄丸が、利用していたものの内になるそうで、同じ地域からも複数の渡海船が尾道港を訪れ、海上輸送が盛んであったことが分かります。

渡海船の最盛期には、住吉浜だけでなく、中央桟橋から渡し場桟橋にかけての西浜にもびっしりと渡海船が並び、壮観な眺めだったようです。

その後、各地の島嶼部に橋が建設されたことや、自動車が普及したことに伴い、陸上輸送が海上輸送に取って代わり、以降はトラックが渡海船の役割を引き継いでいくことになります。

尾道港を行き来する渡海船の姿は、2017（平成 29）年まで弓削島から尾道へ来ていた弓削丸まで見られました。

（市内･今川吉弘さんによる証言）

住吉浜での渡海船への荷積み風景
昭和 60 年代
尾道学研究会提供

近現代の尾道港②　～郷土カメラマンの写真から～

駅前市営大桟橋に停泊中の土生丸
1968（昭和 43）年　土本壽美氏撮影
尾道学研究会提供

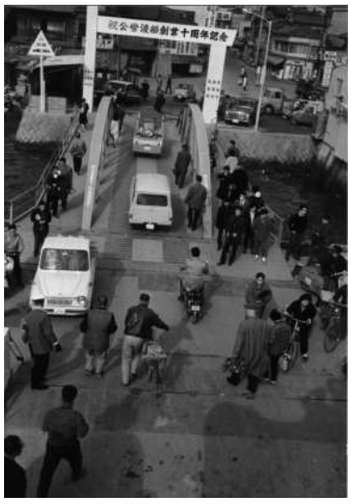
因島―尾道を繋ぐ巡航船として親しまれた「土生丸」。土生は因島の中心市街地で、造船業を中心に賑わっていた。船の屋根にも多数の人が乗っており、乗客の多さに驚かされる。

旧東予桟橋～旧住友桟橋界隈
昭和 30 年代　土本壽美氏撮影
尾道学研究会提供

東予桟橋のあった東御所町～住友桟橋の界隈を、海上から撮った一枚。東予桟橋の所在した角地（画面左）には、水上警察署（海上保安部）が建ち、同保安部の船が見える。東側には住友銀行と尾道商業会議所の建物が見える。

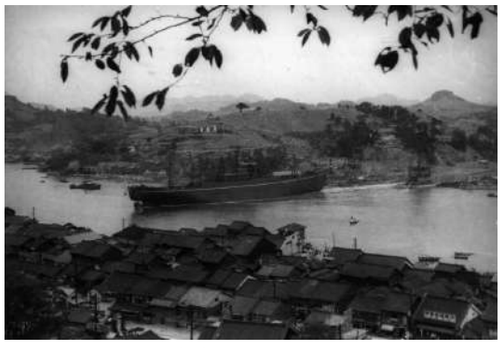
一円ポッポと通称された小浦渡し
昭和 30 年代　土本壽美氏撮影
尾道学研究会提供

一円（渡船賃）ポッポ（焼玉エンジンの立てる音？）の愛称で親しまれた小浦渡し（現・福本渡船)。向島側の日立造船向島工場には大船が入り、造船業の活況が伝わってくる。



土堂渡し場の公営渡船桟橋
1962（昭和 37）年　土本壽美氏撮影
尾道学研究会提供

民営の兼吉渡船から、尾道市と向島町が運営する公営渡船を経て、現在は再び民営で運航される尾道渡船の渡し場桟橋。画面上の尾道本通り側へ向かう人々の流れの中に、公営渡船となってから 10 周年を祝う立て看板が目立つ。



大元丸の進水
1951（昭和 26）年　土本壽美氏撮影
尾道学研究会提供

日立造船向島西工場の船台から、尾道水道（幅約 250m）へ滑り降りた大元丸（全長 134m）。対岸の尾道へ到達しそうなほどの迫力を感じる。幅の狭い尾道水道への大型船進水には、職人技に等しい高度なテクニックが必要とされたようである。

浄土寺下と向東町を結んだ玉里渡船
1980（昭和 55）年　土本壽美氏撮影
尾道学研究会提供

浄土寺下、尾崎漁港の傍から対岸の向東西谷を結んだ渡船航路。発着場所にちなみ、「浄土寺渡し」または日立造船向島東工場の従業員が多く利用したことから「ドック渡し」とも呼ばれた。

尾の道瀬戸内海勧業博覧会

尾道駅前から対岸の向島を望むと、灯台の立つこんもりとした丘が見られます。「小歌島」と書いて「おかじま」と呼ぶその丘は、その名の通り、かつては独立した小さな島でした。

歴史を遡ると、中世には「村上海賊」として知られる因島村上氏の進出以前から海賊の出城が構えられ、尾道水道を往来する船を監視する、海の関所のような機能を持っていたことが想像されます（江戸時代の地誌には、因島村上氏の支城として「小歌島城」の記載がある）。

近世になると出城の姿は消え、松や竹が生い茂る荒地となっていたこと、その荒地を耕作して畑地として利用し、尾道町の商人がそこで得た収穫を年貢として納めていたことなどが地元の古文書から確認されます。

同じく江戸時代には、小歌島の磯辺を「焚場」（木造船の船底に付着する船虫等を除去する為に船底を焼き、乾燥させる作業場）兼、船の修理場として利用したいという願いも出されており、続く明治以降に設けられる造船所の起点とも言えます。

大正時代には、小歌島の東側で操業していた造船所である尾道船渠が、造船景気と本格的な尾道港の港湾整備の追い風を受けて、工場拡張の為の埋立を広島県に申請しましたが、この埋立認可をめぐって、向島西村議会では意見が割れ大いに紛糾。以降、埋立認可に決着がつく 1931（昭和６）年まで、小歌島は埋立問題に揺れ動く事になりますが、そんな最中、小歌島全体を会場にして開催されたのが「瀬戸内海勧業博覧会」です。

同博覧会は、帝国博覧会協会（東京）の主催によるもので、1924（大正 13）年７月 20 日～９月 20 日までの会期で開催されました。島内には博覧会ならではのパビリオン施設が建てられ、「出品館」、「参考館」など産業奨励と振興を目的とした勧業博覧会らしいものから、日光東照宮の模型を展示した「日光館」、歌劇団による「演芸館」といったアトラクションや見世物的なものと幅広くあったようで、中には「美人島大探検」といった何やら怪しげなものまで見られます。

この小歌島での博覧会については、『尾道市史』はおろか、地元『向島町史』、更に戦前発行で時代的に近い『向嶋岩子島史』と、地元史を記録する諸文献のどこにも見当たらず、唯一の資料としてその姿を伝えてくれたのが、開催を記念して発行された写真絵葉書の存在でした。絵葉書は複数の発行元（ローカルな絵葉書は地元の書店等が発行元となる場合が多い）により、複数種類が出回ったようで、博覧会の島に仕立てられた小歌島の全体風景からパビリオン個々の外観まで、会場各所の様子が記録されています。これら絵葉書が唯一の資料とされて来た中で、このほど、『新尾道市史』の編さんに伴う資料収集及び調査の過程において、地元広島の地方紙の一つであった『芸備日日新聞』の内に、小歌島での博覧会を報じる記事が確認されたことにより、主催者や開催時期等の詳しい情報がもたらされました。

（尾の道瀬戸内海勧業博覧会）会場全景
1924（大正 13）年　写真絵葉書
尾道学研究会提供